

2021年3月21日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司会 篠田顕

奏楽 鬼頭容子

前 奏

招 詞

イザヤ書 第59章20節～21節

讃美歌

讃美歌 21-7 (ほめたたえよ、力強き主を)

交 読

詩編 第19篇 (p. 20)

祈 禱

聖 書

マルコによる福音書 第14章1～9節

(新約聖書 p. 90)

讃美歌

讃美歌 21-310 (血しおしたたる)

説 教

「死に立ち向かう」

受難節を歩んでいるわたしたちは、あと一週間もすると受難週を迎えます。イエスさまが十字架にかかれる直前の一週間です。そのようにまじかに迫った十字架への日々を過ごすわたし

たちが、信仰の歩みを整えるためにも、今朝はこの第 14 章が与えられています。

「さて、**過越祭と除酵祭の二日前になった**」。「二日前になった」というのを、どんなふうに受け取るでしょうか。別の訳では、「**過越祭と除酵祭の二日後に迫った**」とあります。そうすると、今日から二日後だとすると、どうしても明後日になってしまう。ところが、それは実際には誤解で、本当は、わたしたち日本人の数え方からすれば、「**過越祭と除酵祭はもう明日のこととなった**」ということで、言ってみれば足かけ 2 日ということです。こういう表現は別のところにもあります。第 8 章 31 節でイエスさまが初めてご自分の復活を予告なされた言葉です。わたしたちがよく知っているのは、イエスさまが十字架につけられたのは金曜日で、そして日曜日には甦られたということです。もしわたしたちがそういうことを考えないで、金曜日から三日目を数えると月曜日までいってしまいます。そこでも、三日というのは、その日をすでに第一日目と数えて、第三日目ということになります。

そうすると、イエスさまがエルサレムにお入りになった日が日曜日で、そこから始まった一週間、復活に至るまでの、七日の出来事のちょうどこの日は、今の曜日の考え方からすると水曜日にあたります。そして翌日の木曜日の出来事が、12節の「除酵祭の第一日」という言葉から始まります。

さらにここでの出来事をよく理解するために、知っておいただきたいことは、過越祭と除酵祭という祭りが、どうして二つ、並んで出てくるのかということです。過越祭というのは、出エジプト記が記しているように、出エジプトの出来事からきています。イスラエルの民がエジプトにいて、エジプトの圧制に耐えていたところから救い出されて、いよいよ旅立ちの日となった時に、夜、子羊を屠って、その血を家ごとに門の所に塗っておきます。そうすると、その血を塗っている所だけは死の力が通り過ぎて、それを塗っていない、つまりエジプトの人々の家の長男だけが、つぎつぎと死んでいくという大混乱が起きた。その混乱に

乗じて、イスラエルの民はエジプトを脱出する。その記念の祭りとして当時、行われていたものです。少し別の見方をすれば、これは明らかに、牧畜の生業と結びついた「いのちの祭り」です。そして除酵祭というのは、＜除酵＞という言葉が示しているように、パン種を入れないパンを食べる祭りという意味で、一週間続いたようです。これは本来収穫の祭りで時期が違っていたようです。明らかに日移したようです。どうしてかということ、過越祭でも種入れぬパンを食べたので、おそらくそのこともあって、ふたつ重ねたのではないかと言われています。そうすると、パンの祭りは、農業に携わる者たちの感謝の祭りです。ユダヤの人たちの中には、農業をする者がおり、牧畜をする者もある。それぞれの者が、別々にお祝いをするのではなくて、ここで一緒にお祝いをしたと考えられます。

こうしたことをどうして少し丁寧にお話をしたかという
と、過越祭にしても除酵祭にしても、これは「いのちの祭り」です。しかも、自分たちで自分のいのちを守ったのではない。かつ

て民族が危機の時に神さまがわたしたちを守ってくださり、死の家から脱出させてくださった。自分たちは、そうした主なる神の御手の中に在って生きる。それが、過越の祭りの時に繰り返し思い起こしたことでした。そして七日間続く、除酵祭で種入れぬパンを食ながら、そこで何を思ったかという、自分たちは、この身体の糧も、また神さまからいただいて生かされている者だということでした。

そんなふうにして、神さまに生かされている者の「いのちの祭り」が始まろうとしている。それがもう明日のことです。明日のことであれば、わたしたちも祭りの前日というのは、どんなに忙しいか知っています。いのちの祭りの準備をしている。その祭りの準備にあたっている、いわば責任、指導者である祭司長や律法学者たちが何を思っていたかという、人を殺す計画です。しかも、主イエスを殺そうという計画です。ただ彼らは、民衆が騒ぎ出すと困るから祭りが終わってからにしようと、この時は考えていたと書かれています。祭りの間、神さまに生かされている、

いのちを感謝している間、それが済んだら、あのイエスをどうやって上手に捕まえて殺そうかということを考えていたことになります。いのちの祭りの備えの中で、人を殺す備えが始まっています。これはとても厳しい出来事です。人間のひとつの現実を示しています。どんなに深く罪に囚われる存在であるかと思います。しかも、そのことをわたしたちは他人事にできるのか。わたしは殺意ということから無関係な人はいないだろうと思っています。10年20年と年を重ねる間に、あの人がいなければ、どんなに楽だろうかと思ったことが、一度もないということはありません。そういう思いをふと抱くことがあるのではないか。そして、それはすでに、その人を殺していることになる。殺そうとしていることになる。祭司長、律法学者たちの殺意は、決して例外的なものではありません。

しかも、ここで殺そうとしているのは、神の言葉を語られたイエスさまです。その意味では、主イエスを殺すことは、神の言葉を殺すことです。ここでもわたしたちの姿が重なります。わ

たしたちは、どんなに神さまの言葉を聞かないふりをする事だろうか。聞こえているのに聞こえない顔をする事か。聞こえていまって、それを受け止めてしまっていて、その通りに生きなければならなくなったら不都合だと、どこかで思うからです。わたしあちは、そのような意味では、実に、しばしばイエスを殺すものです。

だとすれば、自分にとってのいちばん大きな問題は、周りにあるのではなく、自らの罪にある。神と真実の和解に立ち得ていない者が、何を問うても答えを見出すことはできないのは、当然です。

「民衆が騒ぎ出すといけないから、祭りの間はやめておこう」。実際には、イエスさまの処刑は祭りの最中に起こりました。だから多くの人々は言います。「人の企ては貫かれなかった。神の企てが貫かれた」と。ただここで願っていた通りに、イエスを殺すことができた。しかもそれが神のみこころによるものであった。このみこころは、「いのちの祭り」を人殺しの末に、変えてしまう当日の出来事に、正面から向かい合いながら、それを「真実

のいのちの祭り」に、もう一度変えるための戦いをする神のみこころでした。

そこで、最後の言葉に目を留めます。9節、「はっきり言っておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう」。実は日本語聖書には書かれていませんが、この中に小さな「しかし」という言葉が入っています。元の言葉を言うと、「デ」という小さな言葉です。「はっきり言っておく。しかし、世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では」となります。小さな言葉ですが、とても大きな意味を持っていると思います。8節の終わりに、この人は、わたしの埋葬の準備をしてくれたとイエスさまは語られました。ご自身の死を語った。けれどここでは、「はっきり言っておく、世界中のどこでも」です。世界中どこでも福音が述べられる。この福音とは何でしょうか。

このマルコによる福音書は、一番最初に「神の子イエス・

キリストの福音の初め」と書きました。これから書くことは、神の子イエス・キリストの福音の出来事、わたしたちに、喜びと望みをもたらす「いのちの出来事」なのだと、それを書き始める喜びに溢れて書き始めました。この福音書を書いたマルコが、「世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では」と言った時に、どこでも、この福音書が読まれる所では、聞かれる所では、という思いがあったはずです。ここで、ようやくその頂点に来た出来事を書いている、この言葉が世界中で読まれる、聞かれる、世界中で説かれる。その時に、どうか、この女性のしたことも忘れないでほしい。彼女のことを思い起こしてほしい。この葬りの備えは、いのちの祭りに向かっての備えであったというのです。

「イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家において、食事の席に着いておられたとき」、多分「重い皮膚病の人シモン」と聞いて、「ああ、あの人のことだ」と福音書の最初の読者たちは思い起こすことができたかもしれません。ベタニアはエルサレムのすぐ近くで、イエスさまは夜になると、この村に戻られて、このシモンの家で過ごされたと考えられます。そこにひとりの女性

が入って来た。招かれない客です。名前も、どこの誰かも分かりません。どういう人なのか、マルコは関心をもっていません。彼女が持って来たのは、ナルドの香油です。

このナルドの香油についてどんな香りなのか、分からないことですが、ただとても価値の高いものであったことは確かです。ただひとつ、分かっていることは葬りにも使われたようです。人が亡くなる。土葬にします。亡骸の臭いを打ち消すように、滅びの臭いを消すように、このナルドの香油で、自分の愛する者の身体を覆おうとしました。

この香油の価値として、「**300 デナリオン以上に売って**」とありますが、1 デナリオンは労働者一日分の賃金だと言われます。そうすると、ほぼ一年分です。女性が持ってくることができたのですから、そんなに大きな石膏の壺とは考えにくい。まして貴重な高価な香油となれば、その小さな壺を見れば、いかに高価なものであったかが、分かるだろうと思います。300 デナリオンもの

香油を持って歩くことができたのだから、もしかするとこの女性は身分の高い人だったかもしれない。そうであれば、祭司長や律法学者が企てていたことも知っていたのではないか。知っていて、その事で胸を痛めながらイエスを訪ねたのではないか。いろいろに想像することができます。けれど、マルコは書かれていること以上に興味を持たない。ここで女性のことを問題にするのではなくて、彼女にとって、ただひとつ、自分の持っている、一番大切な香油を注ぎたいという思いだけで、ここに来たということです。

「それを壊し」とあります。どんな香りがしたのでしょうか。香水の瓶をぶちまければ、周りの人がびっくりするような香りで一杯になったかもしれません。それは、驚くほどに主イエスにすべてを注ぐ行為だった。このマルコによる福音書の記事では、イエスの頭に注いだとあります。どうして頭に注いだのか。ある人がこう理解しました。「この女性だけが主イエスを王として仰いだ」。どうしてそう理解したのか。香油には、もうひとつの使い方があったからです。それは、礼拝に用いるからです。神を拝む

儀式において香油を用いました。特に、祭司長が立てられ、王が立てられ、あるいは預言者、つまり、神の務めを担うさまざまな人が立てられた時に、その任職のしるしに油を注ぎました。そこから「油注がれた者」という言葉、メシアが、後に<救い主>という意味を持つようになります。だとすると、ここでイエスさまは、最もふさわしい香油の注ぎを、ひとりの女性からしてもらった。当時、女性は一人前の人間扱いをされなかった。どんなにお金持ちでも、どんなに身分が高くても、男性と比べれば、値打ちが低いとされていたようです。その男性たちがイエスを殺すことにやっきになり、裏切ることに熱中している時に、一人の女性が主イエスに愛を注ぎました。これは、わたしたちが心に刻まなければならないことです。人として、主に向かうことができたのは、ひとりの女性でした。

どうしてそれができたのだろうか。周りは、彼女のしたことを見て憤慨します。この香油は 300 デナリオン以上に売れるはずだ。それを貧しい人に施したらいいではないか。ここからいろ

んな議論が出てきます。「貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときに良いことをしてやれる。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではない」。このイエスさまの言葉を取り上げてこういう議論が昔からあります。貧しい人のために愛の実践をすることと、主イエスにすべてを注いで主イエスを拝むことと、どちらが大事かという議論です。それぞれ言い分があります。けれど、そうした議論をここですることの意味は無いように思います。イエスさまは「わたしはいつも一緒にいるわけではない」と言われた。それどころか、しばらくして、身体が見える主イエスはいなくなられる。そしてそこで一回限りの主イエスの死が起こります。かけがえのないことが起こります。その死に直面している、主イエス、その主イエスに、女性の目と存在全てが注がれる。それだけのことです。

ここではたった一度だけのことが起ころうとしています。それをじっと見つめることができたのは、イエスさまご自身と父なる神、そしてこの女性だけでした。その女性が香油を注いだ。

イエスさまは言われます。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ」。

この「良いこと」という言葉は、しばしば「美しいこと」と訳されます。7節に「したいときに良いことをしてやれる」という言葉がありますが、その「良いこと」というのは別の言葉です。女性のしたことについては、イエスさまははっきりと特別な言葉を使われました。彼女のしたことは単なる慈善ではありません。「美しい」のです。どうして美しいのか。ここに表れてきている美しさとは何か。ここの箇所である人がこう説明しました。「わたしたちの神はご自身が慰められることを欲しておられる」。わたしたちはこの言葉を聞いてどう思うでしょうか。神さまともあろう方が慰められることを求めておられるというのはおかしい。そう思うでしょうか。けれど、もしそう思うとすれば、それは、この300デナリオンを売って、人に施したらいいと言う人たちの考え方になります。それは、イエスさまの傍らにありながら、主イエスがどれほど深く悲しみ、わたしたちのために悲しみ、苦しみ、痛みを覚えておられるかを感じない人の考え方になります。

「わたしたちの神はご自身が慰められることを欲しておられる」。では、誰が、何をしたらそうなるのか。神の恵み、神の愛、それをわたしたちが受け入れることだけです。主イエスがここでまっすぐにいのちを、愛をもって十字架へと歩みを進まれる時に、それを自分のすべてをもって受け止める者がいれば、それが主イエスを深く慰めること、主イエスが喜ばれることになる。それが美しいことだと主イエスは言われます。そして、その美しさの中で、イエスさまはますます十字架への決意を深められたことと思います。

言うまでもないことですが、そのように主イエスを深く愛することを知った者は、この後、貧しい人が傍らにいた時に、わたしは、イエスさまにみんなあげてしまったから、あなたたちのことは知らない、などと馬鹿なことは、一度も考えなかつただろうと思います。貧しい人たちを、単なる慈善事業の対象者としてしか、結局は見なかつた人々よりも、もっと深く真実に愛した主

イエスのことを知っているのですから、いつも一緒にいる、助けを必要とする人々、愛する者のために、自分が何をしなければならぬかを、よく知っていたに違いないと思います。

殺意だけで真っ黒にいのちの祭りが塗りつぶされるのではなくて、そこに、もうすでに、主のいのちと、それを受け止める真実の信仰の心が光っていたということは、わたしたちにとっても、とても大きな慰めです。いったい、わたしたちは、どのようなものを、ナルドの香油としてイエスさまに注ぐことができるのか。そのことを問い続けながら、わたしたちもまた望みを持ってこの福音書に聞き、喜びに生き続けたいと願います。お祈りいたします。

遙か昔、遠い所で起こった出来事が、わたしたちにとってどれほどの力ある慰めとなっているかを思い、感謝いたします。父なる神さま、あなたが不思議な御心をもって一人の女性を立てて、ご自身のみ子イエスを慰められました。持てるもの

すべてを注いで、そのあなたのみわざに仕えることができました。どうかこの一人の人を、わたしたちもいつまでも忘れることがありませんように。思い起こし、そこに望みと力をいつも知り続けることができますように。そのためには、あなたがわたしたちの信仰の想像の翼を広げてください。そして、その翼が、わたしたちと共にある慰めを必要としている人々のところにまで届きますように。感謝と願いを主イエス・キリストのみ名によって祈ります。

アーメン

讚美歌

讚美歌 21-459 (飼い主わが主よ)

献 金

讚美歌 21-65-2

報 告

週報の3頁を御覧ください。

祈 禱

それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>